筒井新聞　第 330 号（2）

映画「マルクス・エンゲルス」が問いかけるもの

佐藤和宏

１．　上映のはじまり

木洩れ日・微かな小鳥のさえずり―静寂に包まれた鬱蒼たるプロイセンの森の情景。黙々と枯れ枝を拾い集める貧しき人々の群れ。しじまを切り裂くように地響きを上げて殺到してくる騎馬警官隊。逃げ惑う群集を追い詰め、女子供の見境もなく打ち降ろされる警官の棍棒。穏やかだった森が一瞬にして虐殺の修羅場と化す。

色彩を押さえた古典絵画のような画面、理不尽な暴力の前の為す術もない群集は、迫害に晒された殉教者たちの祈りの姿を彷彿とさせる。19 世紀中葉のヨーロッパへ観客を一気に誘う、強いインパクトのプロローグだ。

2018 年 5 月 2 日(水)筒井哲郎・律子・私の三人は神保町の岩波ホールで映画「マルクス・エンゲルス」を鑑賞した。カール・マルクス生誕 200 年記念作品との触れ込みである。連休半ばの平日夕刻ながら客席は 8 割り近く埋まっており、高齢者の多い観客に混じって若者の姿もチラホラ。場内の雰囲気・その静かな熱気から、マルクスへの関心の高まり・再評価の気配が感じられた。

映画冒頭の〈木材窃盗取締法〉を巡る惨劇は、当時ヨーロッパを覆っていた絶対王政の恐怖支配を象徴する出来事だった。かつて誰のものでもなく人々に恩恵をもたらしてきた森。それが所有者の出現によって暖を取るための枯れ木拾いや伐採が命がけのものなってしまった。シーンにかぶさるマルクスのナレーションから場面は『ライン新聞』のオフィスへオーバーラップする。〈木材窃盗取締法〉を真っ向から批判する記事を書いた若きマルクス(24 歳)は当時『ライン新聞』の主筆記者だった。言論弾圧の尖兵・官憲の手がオフィスに迫る中で「さあ、みんなでブタ箱に行こう!」このマルクスのセリフはカッコ良すぎ(笑)。

『ライン新聞』が廃刊に追い込まれた 1844 年、マルクスは『独仏年誌』を発刊し『ヘーゲル法哲学序説』『ユダヤ人問題によせて』などの論文を意欲的に執筆。同誌はエンゲルスの『国民経済学批判大綱』も掲載している。またこの時期、マルクスは幼なじみだったヴェストファーレン男爵家令嬢イェニー(マルクスより四歳年長)と結婚している。

イギリス・マンチェスターの紡績工場。

マルクスより二歳年下のフリードリッヒ・エンゲルスは、父親が共同経営するこの工場で働きながら過酷な待遇の労働者たちの実態調査をしていた。頻発する作業事故と不当な

労働規約に抗議する労働者たち。その先頭に立っていた若い女工メアリー・バーンズを父親がクビにする(啖呵を切って飛び出したのは彼女の方だが)。メアリーに魅せられたエンゲルスはストーカーさながら彼女の跡をつけ、貧民窟にさ迷い込んでいく。

ドイツを追われたマルクスとエンゲルスはフランスのパリで運命の再会を果すが、初めて呑み交わし、夜を徹して語り合うシーンは印象的だった。「君は天才だ」とマルクスを讃えるエンゲルス。「君の論文[1]も前人未到の一級品。でも何故あれほど労働者に精通してるんだ？」とマルクス。「色々あって。実は恋愛のおかげだ」と答えるエンゲルス。
アイルランド出身・女工あがりのメアリー・バーンズはこうしてエンゲルスの生涯の伴侶となる。

ドイツ・フランス・ベルギー、検挙と国外追放を繰り返し、極度の貧困に喘ぎながら、新な学説の論証と社会主義革命に邁進するマルクス。論文のまとめや翻訳に力を尽くすマルクスの愛妻イェニー。批評と労働運動、経営者の立場を行き来しながらマルクス一家を支援し続けるエンゲルス。マルクスとエンゲルスの共著のほとんどは三人の作業といわれている。

映画は延々と繰り返される論敵との戦い、邂逅と離散を経て、歴史的な『共産党宣言』でクライマックスを迎える。マルクスとエンゲルスのめぐりあいから五年の歳月。文字通り若き思想家・革命家たちの青春の断章を描く映画だった。

２．　幕がおりてから

岩波ホールを後にした私たち三人は、近くの学士会館のレストランで会食しながら、映画「マルクス・エンゲルス」の感想を語り合った。実はこの数日前、年明けから携わっていた京王線高架計画訴訟の本『沿線住民は眠れない』の校正を終えていて、五月半ばの発刊を控えた出版記念(三人の間の)の会食でもあったのだ。
「思ってたより軽い映画だったわね。テンポが良くて二時間がアッという間。まだ続きがあると思ってるうちに終わっちゃた」と律子さん。筒井さんからは「バウアー、グリューン、シュティルナー、デューリングから無政府主義者のプルードン、バクーニンまで登場する映画。予備知識がなければ誰が何なんだかわからないよね」と。確かに論争に明け暮れる思い切り多弁な映画だった。

以下は三人の会話を私なりにまとめた独断と偏見の供述である。

軽い表現とアップテンポは、思想・哲学に疎いであろう一般観客を意識したハイチ出身の映画監督、ラウル・ペックの一つの狙いだったろう。それにしてもなんとハンサムなマルクスだろう。エンゲルスに至っては滴るような美男子である。これも監督の一つの嗜好だろうか(笑)。

---

[1] 『イギリスにおける労働者階級の状態』

舞台(芝居)のようなセリフの終始には疑問も残る。枯れ枝拾いの群集襲撃シーンは導入構成としては理解できるけれど、肝心のプロレタリアートの表現はどうだっか？　団交のような工員たちの抗議シーンの中でセリフのみで語られる労災事故。繊維を蒸すために暖房密閉された30℃を超す工場で強いられる一日16時間もの苛酷な労働。そうした実態は画面には映されなかった。あるいはプロイセン国王の暗殺未遂・フランスの二月革命・1848年(共産党宣言がなされた年)にケルン・ウィーン・ベルリンに続発した市民蜂起などの歴史的な事件もセリフで触れられるのみ。つまり、マルクス・エンゲルスのアイディアのバックボーンである労働者の救いがたい状況・血塗られた動乱のヨーロッパ情勢といった歴史のダイナミズムやリアリズムは投影されなかった。この映画は『共産党宣言』執筆をもって終わるが、1861年～1865年のアメリカ南北戦争(マルクスはリンカーンとも文通している)や、1868年の明治維新は後日譚にあたる。この映画の軽さは、こうした激動する世界を描き切らない、リアリティの抑制から来ているのではないだろうか。

以前、私は何本かの映像作品を手がけている。座右の銘は「語るべからず、映像をして全てを語らしめよ」(セリフで過剰に説明するな、出来るだけ映像で伝えるように)。実際は制作サイドの要求に負けた饒舌な作品がほとんど、未だに納得のゆく作品は作れないでいるけれど。

当然、軽さもテンポもラウル・ペック監督の意図するところ。社会的に影響が大きい歴史上の巨人たちを二時間で描くのは分量的にも予算的にも容易ではなかったはずだ。マルクス・エンゲルスの濃密な絆と妻たちとの関わり、青春期に的を絞った構成にも納得がゆく。しかし、それでも私には何か物足りない。特にマルクス・イェニー・エンゲルスが彷徨するボヘミアンな雰囲気は、ジョージ・ロイ・ヒル監督のウェスタンムービー「明日に向かって撃て」(1969)(伝説のギャングスター、ブッチとサンダンス、二人に絡む女教師エッタの刹那的な青春)や、フランソワ・トリュフォー監督のヌーベルバーグ映画「突然炎のごとく」(1962)の男二人・女一人の自由で奇妙な三角関係を彷彿とさせる。確かにマルクスの妻イェニーは貴族の出自であり、エンゲルスの内妻メアリー・バーンズは貧民街の女工上がり、当時の階級差別や因習からすれば考えられないカップルである。マルクスもエンゲルスも本質的にそうした事柄に拘泥しない自由人だった証しだが、貴族にもブルジョアジーにもそれらを受け入れていける人物がいたこと(一筋縄ではいかなかっただろうけれど)、共産主義社会の橋渡しとなる自由の土壌が醸成され始めていたことに注目する。マルクスはあの面相からしてスマートな生き方とは無縁のように思う。卓越した知能と生活破綻者の側面を合わせ持つ厄介な人物だったに違いない。貴族の令嬢、姉さん女房のイェニー(マルクスとは逆な意味で家計を知らない)だったからこその絶妙な取り合わせだったと思う。私はブルジョワジーと革命家の二足のわらじを貫き通し、マルクスを庇護し続けたエンゲルスの智力・能力・対応力に瞠目するけれど。エンゲルスの生誕200年まであと2年、彼についての知識をより深めたいと思っている。

「マルクス・エンゲルス」は社会的・政治的な問題提起を孕みながらも屈折や苦悩を削

ぎ落とした、いわば良いとこ取りの文芸作品。一幅の古典絵画のように美しい映画だった。理想を掲げ真実に肉薄したマルクスとエンゲルス、天才たちの真摯な生きざまには脱帽するしかない。その叡智の燠に息を入れ、再び篝火として未来を照らすことは出来ないだろうか？

アメリカ・ファーストのトランプ大統領登場、ロシアや中国などの大国の思惑。中東に戦火は止まず、格差と差別、ポピュリズムが広がる分断された世界。嘘と忖度にまみれたこの国の行方。ブルジョワもプロレタリアートも社会構造の本質は変わっていないのに。情報が氾濫して現実を覆い隠し、ミー・ファーストのぶら下がりが充満する現代は、マルクスとエンゲルスの生きた時代よりも社会の病質を複雑に重症化しているように思う。私たちに今できることは、いったいなんなのだろうか。

（2018 年 5 月 6 日）